

令和 4 年 6 月 20 日現在

機関番号：12301
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2021
課題番号：18K10458
研究課題名（和文）父親のための育児支援・働き方に関する研究

研究課題名（英文）Child support and way of working for father

研究代表者

牧野 孝俊（Makino, Takatoshi）

群馬大学・大学院保健学研究科・准教授

研究者番号：50389756

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：父親の育児不安は、妻の妊娠中に受講した事業内容との乖離により生じており、その内容は子どもの生活リズム、夜泣き、子どもの病気や事故などであった。また育児ストレスは、育児休暇取得の方法において生じており、その内容は育児休暇取得の確認を上司、人事部、職場の仲間から意向の確認をしてもらいたいというものであった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は父親を対象とし、父親用に開発された尺度を用いて、乳児をもつ父親独自の育児不安や育児ストレス、ワークライフバランスの現状と今後の課題についての結果が得られることが独創的な点である。

研究成果の概要（英文）：child-rearing anxiety of father is life rhythm, night cry and illness and accident of baby. Because father doesn't expect those before childbirth. Then childcare stress of father is to take a childcare leave. Because father want to be confirmed it from chief, Human Resources division and colleagues.

研究分野：小児看護

キーワード：父親

1. 研究開始当初の背景

父親が育児に参加することを奨励する風潮が強くなってきていることは、核家族のため母親が育児の援助を求めることができるのは父親しかいないこと、出産後も働く女性が増えたこと、女性の意識変化によって旧来の男女の性役割分業意識が薄れたことなど、社会の変化と無縁ではないと窪（1995）が報告している。また、現在子育て真最中の世代が産まれた頃、「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」という考えに対し、男性も女性も8割以上の方が「賛成」と答えていた（総理府、1972）。つまり現在子育て真最中の父親が子どもの頃、まだ家庭は女性が守るべきものという常識があったことになる。父親が育児に関わる必要性について、青木（2004）は父親の育児不参加による子どもの成育の大きな影として、拒食・過食症などの摂食障害、不登校や引きこもりなどを報告している。また、神原（2006）は虐待予備軍である保護者の実態として、虐待の傾向は夫婦関係や子育てに対する夫の協力度、子育て不安との関連が高いと報告している。これらのことから、父親が母親の助手にとどまっているだけでは全く足りず、母子関係とは別に父親独自の父子関係を形成することが必要であると考え。このため父親は「もう1人の母親」ではなく、「もう1人の男親」として育児に関わる必要があると考える。

小児看護領域の看護業務基準（日本看護協会、1999）の中の1つに、家族の自責・育児への不安・ストレス・育児困難が生じないように調整することを援助としてあげられている。しかし、現状において家族の一員である父親は、母親側から捉えられた概念で育児に対する不安やストレスが報告されている（牧野、2011）。また、今後父親の育児が増加することが予測されるため、父親の自責・育児への不安・ストレスに関して母親の概念ではなく父親独自の視点によって構築される必要があると考える。なぜなら、夫婦の育児に対する思いには違いがあること（上田ら、2005）や育児ストレスの内容が異なること（宮本ら、2006）が報告されているためである。また、岩田ら（1998）は、父親役割への適応における父親のストレスとその関連要因における考察で、父親の育児ストレスの実態、育児観と育児ストレスとの関連について十分解明されていないと報告している。

これらのことから、現在の父親は育児に関して社会的期待を受けているが、実践の父親モデルを持っていない状況である。この父親を対象とした研究において、育児に関わる必要性が論じられているが、父親独自の育児不安・育児ストレスやワークライフバランスの現状と今後の課題については論じられていないと考える。

以上のことから、小児看護における対象の1人である父親を、母親と同様の介入ではなく、父親特有の関わりがあることを理解し介入する必要があると考える。このため、父親特有の関わりを理解するため、父親はどのような育児観を持ち育児しているか、パパママクウォーター制度を導入している市町村を含む全国11の保健センターの協力を頂き、子どもの乳児健診や予防接種のために来所された父親58名に対して半構成的面接を実施した。これにより、父親の育児観として5のカテゴリーが作成された。この育児観とした5のカテゴリーは、全国の父親であること、対象が様々な労働条件であること、人数を確保し質的研究結果が飽和に至っていることから、これまでの父親を対象とした研究における課題（牧野、2011）をクリアするものとなっている。

このため、この質的研究の結果を基に父親の育児観を量的に実施できるように尺度を作成する。また、この尺度とは別に、父親の育児不安尺度（川井、2008）、父親の育児ストレス尺度（清水、2006）の3つの尺度を用いて、父親独自の育児不安・育児ストレスを明らかにする。

2. 研究の目的

本研究では、下記2点を研究目的とする。

- 1) 父親独自の育児不安や育児ストレスを明らかにすること
- 2) 父親独自のワークライフバランスの現状と今後の課題を明らかにすること

3. 研究の方法

当初の予定では、全国の乳児をもつ父親10,000人を対象とするため、200地点の保健センターのご協力を頂き、1つの保健センターで50人の対象者を募集する予定であった。

しかしながら、新型コロナウイルス感染症拡大に伴い多方面で甚大な影響が生じ、保健センターの協力を得て、対象者を募集することが困難となった。具体的には、①研究者が学部や大学院における講義や演習・実習の対応を優先せざるを得ないというエフォートの変更、②県を越えての移動自粛、保健センターの事業停止・延長に伴う研究調整困難、③保健センターへの外部者入所禁止、対象者との接触困難に伴う対象者募集困難が生じたことによる。

そのため、父親独自の育児不安や育児ストレスを明らかにすることを目的に、Google Formを用いたWeb調査を実施した。

1) 対象者

乳児をもつ父親 1,480名

2) 方法

Google Formを用いたWeb調査

3) 分析

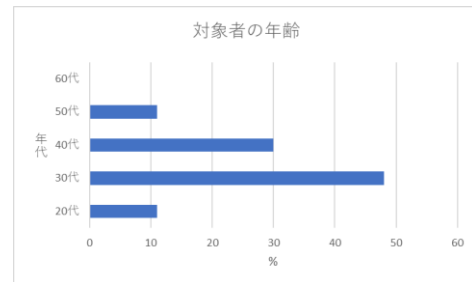
Excel を用いた単純集計

4. 研究成果

1) 年齢

ご協力頂いた乳児をもつ父親の年齢は下記の通りであった。

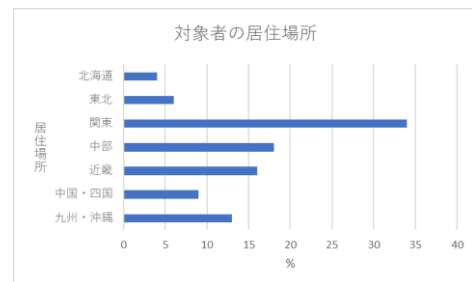
20代：11%、30代：48%、40代：30%、
50代：11%、60歳以上：0%



2) 居住

ご協力頂いた乳児をもつ父親の居住場所は下記の通りであった。

北海道：4%、東北：6%、
関東：34%、中部：18%、
近畿：16%、中国・四国：9%、
九州・沖縄：13%



3) 妻の妊娠中に受講した事業内容（回答が多い順）

子どもの世話、今後のスケジュール、沐浴体験などで、子どもが産まれた後に父親が実際に必要となる内容で占められていた。

4) 子どもが産まれた後に困った内容（回答が多い順）

子どもの生活リズム、夜泣き、子どもの病気や事故などで、子どもが産まれる前に、想定できていなかった内容で占められていた。

5) 子どもが生まれた後に良好な夫婦関係を継続するための工夫

コミュニケーション、感謝などで、子どもを共に育てようとするポジティブな父親が多いと考えられた。

6) 育児休業取得期間

1人目出産時の取得期間は1週間以内が80%、子どもの人数が増えると取得期間は1週間以上の割合が増える傾向にあった。

7) 育児休業取得時期

夫の60%は妻の入院中に取得をしている。一方で、子どもの人数が増えると産後1ヶ月から母親の復職までの期間のタイミングで取得する割合が増えた。

8) 育児休業取得に対する意向

上司が育休取得の確認：60%、人事部が育休の取得の確認：45%、職場の仲間が育休取得の確認：33%と、自ら育休取得を切り出すことが難しく、意向を確認してもらいたい父親が多かった。

9) 今後について

今後は、看護師が父親に対して行うサポートや指導などの育児支援のあり方を父親の視点から検討する必要があると考える。また、次世代育成支援対策の目標の一部である父親のワークライフバランスを支持・検討するため、男性の育児休業取得率や職場環境を検討する必要があると考える。

本研究の限界として、震災や新型コロナウイルス感染症の影響により以前協力を頂いた保健センターが研究の受入れが困難となり、十分な対象を募ることができていないため、一般化するためには十分な検討を要すると考える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 牧野孝俊	4. 巻 21(13)
2. 論文標題 父親のワークライフバランスの現状と課題	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 地域ケアリング	6. 最初と最後の頁 72-74
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------